

歯周病所謂歯槽膿漏症の一治療法*

—特に歯肉切除法について—

歯科保存学第一教室 服部玄門

歯周病所謂歯槽膿漏症の治療を最も合理的に行うためには、まず本症の原因、病変並びに一般的臨床症状を熟知して、症例ごとの諸診査を入念に施行することである。そして、正しい診断、臨床分類のもとに処置法の適応を確立しなければならない。

本疾患に関する学問は多くの先人達の経験的事実や学問的裏付けによって進歩して来た。一方、治療法に関しても、これらの発展に伴い長足の進歩がみられるようになった。

さて、歯周疾患の治療目的は歯周組織に存在する病変の消失にあるが、その最も主眼とする所は、盲のうの徹底的除去と改善にあるとされている。このような目的をもった局所療法の一つに歯肉切除術がある。

本法は、盲のうを形成している罹患組織を一挙に切除、除去し切除創面の癒着治療によって健康な歯肉のうを回復するのが、その目的である。術式としては歯肉の切除と歯根面の清掃より成り立っている。しかし、この場合でも問題になるのは切開方向であって、治療後の歯冠と歯肉の形態的移行関係を考慮しなければならない。したがって、場合によっては、歯槽骨の整形をも加えなければならないこともある。とくに、この手術により、附着歯肉の喪失、口腔前庭の狭隘化、さらに

歯槽骨頂附近の健康軟組織の除去などの防止対策を併用あるいは考慮した手術が行なわれるようになっている。また、切除創面に応用される歯肉包埋剤は粉末と液とからなるセメント様物質で創面を感染および外来の諸刺激から保護して順調な治療の促進をはかるために、一定期間応用されるものである。なお、本手術の術式等については、いずれの専門書にも詳細が述べられているので参照されたい。

以上からして、歯周疾患の一治療法の大略を述べたが、この処置法が完全に行ない得たとしても、再発の原因は、歯牙の汚染が最大なものであることを忘れてはならない。

この汚染を防禦するためにも、術者は、必要な処置操作がすべて完了するまでは、患者の意向を尊重するも、これにとらわれることなく、局所のみならず全身に対しても、仔細な注意と努力を払うべきで、処置終了後は、特に患者が家庭において日常行すべき諸事項について注意をあたえ、かつ、定期的に受診させることを励行する後療法こそ、処置の成果を永続ならしめるものであることを教示し、長期間にわたって術者の責任を果すことが大切である。このことは、本療法のみならず、歯周疾患のすべての療法に適応するものである。このように歯周疾患は、患者と術者との共同作業によって、健康な歯肉が作られ、健康な口腔が作られることを結論としておきたい。

* 第7回、昭和48年6月22日開催